淨土

四月號

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十一年三月廿日印刷納本　昭和二十一年四月一日發行

第十二卷　第二號

僧衣をまとひて　山川瀨專之助　山本幹夫
隨筆　春雪　吉田絃二郎
淨土は眞實に存在するか　中村辨康

詩　獨居　萱本正夫
小說　閻魔秘帖　草田直宗
日光と食物　佐々木林治郎
童話　三つの寶　内山憲尙

春雪

吉田絃二郎

立春といふ言葉を聽くだけでも心躍る思ひがする。ことしの冬も無事に過ごして、いよいよ春を迎へることができた。しかも暦の上の春になつてから雪が多く寒い日が續く。

春立つや殘んの雪の一二寸

すでに春だと想へば積もつた雪も苦にはならぬ。冷たいといふことも、寒いといふことも心の持ち方一つである。炭も乏しきまゝに、寒い冬を凌ぎ了はせたればこそ立春のありがたさも一しほ身に泌みる。

この冬も日の照るかぎりは庭に椅子を持ち出して、そこで本を讀み、原稿を書き來客と談しつゞけて來た。こんな時いつも傍を離れなかつた三匹の犬が、三匹とも裏の竹籔の蔭に眠つてしまつたのが寂しいが、頭の上の樫の梢に巣喰ふてゐる雉子鳩の羽叩きは十年來何のかはりもなく、鶯やのじどがつい五六尺の近くまで寄つて來て、きよとんとした顔で人を眺めてゐる姿も昔のまゝである。極樂淨土には「七寶の池あり、八功德水其中に充滿し……金銀、瑠璃、硨磲、赤珠、瑪瑙を以て之れを嚴飾し云々」と說かれてあるが、われ等にとりては結構過ぎる。炭なきがゆゑに日の光りを追うて讀書し、讀書しつゝ犬の死を悲しみ、讀書しつゝ雉子鳩の寂靜の聲を梢頭に聽く今の境涯こそ、われ等にふさはしい淨土である。私はこのやうな淨土を願ふ。

昨日の雪が消え殘つて、空は曇つて寒い。不圖思ひ出して、裏の竹山に入り、笹の葉に積もつた雪を掻きあつめて雪の水で茶を點てた。水道の水よりも多摩川の水は甘いが多摩川の水よりも雪の水は甘い。淡々として凝滯するところなき味である。舌端にいさゝかの執着を遺さずして、風の如く來り神韻縹渺の氣を撥無して去る。わたくしはもすこしのところで、この冬、雪の茶を喫することを忘れるところであつた。わたくしはこの雪茶を喫することを得た今日の一日の惠みをありがたく思ふ。今日の淨土である。

今日はさらに惠まれた日であつた。この冬に入つてから佛に供へる花がなく、庭の寒椿の一枝二枝を手折るばかりであつた。今朝は雪ぐもりの詮方もなく、粉炭を吹き立ててはは火桶にかじりついてゐたが、軒を打つ雪解けの音のはげしさに窓の外を見れば、いつの間にか、碧空が覗いてゐる。すつかり春の光りである。庭に下りた刹那に頭上にわびすけの花が咲いてゐるのを見出した。

いつもは十一月の末には咲くわびすけが十二月になつて

も、一月になつても咲かず、立春の後に咲いたわけである。久しく待ちわびてゐた客人を迎へ得た心地である。一枝を剪して佛前に供へた。

山茶花に似て山茶花よりもわびしく、白椿に似て白椿よりも淡く、茶人の好きさうな花であるが、茶人よりもむしろ老子莊子に愛せらるべき花であらう。芭蕉に愛せらるべき花であらう。芭蕉の「佗びてすめ月佗齋が奈良茶歌」といふ句を、何となしに思ひ出させる花である。

このころは書物を得ることが非常に困難になつて來た。その結果書物を大切にするやうになつた。今までは空しく書庫に藏したまゝ埃に委ねてゐた書物を、取り出しては讀み直すやうになつた。讀み直して見ると、思ひがけなく尊い眞理に觸れることがある。もつと、もつと生きのびて、いろいろの本を讀んで見たいと思ふ。

書物がすくなくなつたので、たいていの人は書物の尊いことを知るやうになつた。一粒の米の尊さを知り、一顆の林檎の尊さを知り、一塊の炭の尊さを知り、一時半時の日光のありがたさを知るやうに運命づけられた今日の生活は悲愴であるが、このどん底の生活にも淨土はある。

三四年も前、數寄屋橋の上で、上品な母と娘が一かけらの炭を拾うて、紙に包んで行くのを見ていたましい氣になつたことがあつた。今日だつたら、當然のことにして看るであらうが、このころでは一片の炭も落ちてはゐない。

庭の栗の木の下に古びたつくばひがある。毎朝鶯が來ては水を浴びるので、つくばひの面に二筋三筋の水の跡が流れてゐる。もしわたくしが朝寢をしたをりは、水を浴びた跡だけが濡れてゐるので、「今朝も鶯が來たな」と思ふだけでも明るい氣持になる。鶯の訪れた痕を見ない朝はいさゝかさびしい。家も持たず、着替も持たず、明日の餌も持たず、しかも安住するところを持ち、朗々と春來を告ぐる鶯を眺めてゐると、齷齪するこのごろのわが心を恥づる氣にもなる。庭の片隅にも賢者の姿は見出される。

先代の源太夫の「堀川」を京極で聽いたことがある。亡くなつた妻と二人でその歸りに鴨川に出た。雪が降つて千鳥が鳴いてゐた。その話をわたくしの旅の記に書いたのを讀んで、妻の死後わたくしを訪ねてくれた人があつた。源太夫の三味線を彈いてゐた豐澤仙絲の弟子の、仙三郎といふ若い人であつた。仙三郎君は遺骨の前で「堀川」を一段彈き語りしてくれた。その後病氣にかゝつたといふことでたびたび大阪へたよりしたが、いつの間にか消息も絶えてしまつた。けさ不圖若い文樂の仙三郎君のことを懷ひ出した。「思ひ出す人もあり降り今朝の雪」

日光と食物

佐々木　林治郎

朝早く起きる。外は霜で眞白になつてゐる。家の中にゐても指がち切れる程冷い。やがて太陽が昇つて日光が射して來ると途端に暖かにな る。薪も炭も乏しい今日此頃では日光ほど有りがたいものはない。日光の恩惠をしみじみ感ずる。

飯を食べると温くなる。熱い飯ならば猶ほ更のことであるが、冷い飯でも食べてから暫く經つと體の温くなるのを覺える。飯の持つ榮養素の特異な作用である。五〇〇グラムの飯を食べる。その中に澱粉が一五〇グラムあり蛋白が一五グラムあると五一カロリーの熱が先づ發生する。それから更にこの榮養素が體を温める爲に全部使はれると六六〇カロリーの熱を發生するのである。

飯を食べて體の温まるのは飯に熱源となるものがあるからで、夫れが榮養素である。米や甘藷の澱粉はその榮養素である。榮養素の無い食物を食べても腹は膨れるが體は温まらない。澱粉のほかに脂肪や蛋白も體を温める効力を持つてゐる。

藁や木の葉には澱粉は無い。だから之をどんなに粉にして食べても腹を膨らす以上の効果は無いわけである。粉食は何でも粉にすれば食物になるといふ意味ではない。榮養素があつても其の儘では食べられないものや、粉にすることによつて消化を良くするとか謂ふやうなものに於て意味があるけれども、元々熱源になる成分を含まないものは粉にしても主食としての役には立たないのである。

主食になる食品の榮養價値はその中に含まれる熱量で決められる。玄米は三二七白米は三四四大麥は三三二稗は三二三小麥粉は三二五高粱は三三二玉蜀黍は三二一はとむぎは三四五カロリーであり、甘藷粉は三三二馬鈴薯粉は三二一里芋粉は三三一でまた大根粉は二九六わらび粉は一七七南瓜粉は二六〇よめな粉は二七二いたどり粉は二七三カロリーの如く穀物や芋類は主食になる立派な食品であるが蔬菜は熱源食としては之に劣り、木の葉や野草は更に遙かに劣る。

然し我が國現在の食糧事情からどうしても穀物や芋類以外にも熱源を求めなければならないので、是れ等を有効に利用する方法を生産の側からと消費の立場からと兩方から研究しなければならない。

我々の體は植物纖維を消化することができない。山野の草や木の實を利用するにも葉や莖を利用するにも、できるだけ纖維の少い部分を取ることが先づ肝要である。夫れには乾かして粉になり難い部分とか水を加へて磨るときに碎け難い部分を除いて食用にすることである。

家畜は人と異つて纖維の多い植物を食べても良く之を利用して榮養に役立てる。山羊は人の食べられない程に纖維の多い草を食べても乳を生産するし、家兎は體肉を造り上げる。家庭農園に物を植えて植物性食糧の増産に努める一方附近の野草や木の葉や人の食べられないもので山羊を飼つて乳を飲み、家兎を飼つて冬の肉と毛皮を自給することもこの際やれる増産の方法である。

蛋白は體に元氣を附けるのにどうしても必要な榮養素である。大豆豌豆蠶豆いんげん落花生などを植えてその給源にするもよく、更に山羊

獨居

萱本正夫

貝殼にたんぽゝ海となる夜明
春日を窃にがうな寄りゐたる
草を喰む牛渡しけり春の水
蝶々羽搏きてみづの朧なる
ひたと來て螢火ともす夜の障子
花雫して羅の濡れゐたる

獨居

薯をむく手の衰へも殘暑かな

や家鴨を飼つて乳や卵を食べること或は家兎やヌートリヤを飼つて肉と毛皮を生産するやうな動物蛋白にまで及べば之に越したことはない。

食物の熱源榮養素が實は其の源は日光にある。土に生えた植物が生長して炭酸瓦斯と水とから澱粉をつくるときに、其の中に日光のエネルギーを含めて蓄へるのである。この仕事を最も有利に經營するのが農業であり、そのときの化學的變化を最も有効にする爲に農業の技術研究が爲されてゐる。

農業の重要な仕事は日光を食糧として集積貯藏することである。之を直接食糧化するのは米麥等の植物生産であり、之を乳肉卵等にするのが動物生産特に畜産である。

生産高の少いのに欲しがる人の多いものが普通は貴いものになつてゐる。此の頃の食糧品がその通りである。日光は誰にでも公平に欲しい者には與へられてゐる。その有りがたさを今日しみじみ感ずるのは矢張り食糧と密接な關係にあるからである。

農業者が日光の恩惠を感じて食糧の生産に精進すると共に、その食糧を受ける消費者も之をよく知るべきである。日光は誰にでも自由に與へられてゐる。

（筆者は東大教授農學博士）

三つの寶

内山憲尚

昔、印度に一人の若者が居りました。

春のうららかな日です、若者は山を越へ谷を渡つて旅から旅を續けて居りました。この若者はお父さん、お母さんに死に別れて、一人きりになりましたので、どこかよい勤め場所がないだらうかと、國から國へ幸福を探ねて旅を續けてゐるのでありました。

深い山へ入つて仕舞つて、心細い一人旅でした、どこかに家がないだらうか、どこかで人に逢はないだらうかと思ひ乍ら坂道を歩いてゐました。大きな木が繁つてゐる森ですから獵師さへも通らない樣なところです。

若者の耳へ入つたのは話し合ふ言葉でした。若者は急に心強い氣持ちになつて、聲のする方へ近寄つて參りました。

だんだん近づいて見ますと、その聲は強く大きくしかも、何か云ひ爭つてゐるやうな、どなり聲です。

若者は大きい杉の木の後に隱れて、聲のする方を見ますと、驚きました。それは人間ではなく、二匹の鬼ではありませんか。

「駄目だよ、この靴は俺のものだよ。」

「だつてお前は魔法の杖を取つたじやないか。」

「なんだと、お前の方が先へ、俺の欲しいと思つてゐた玉手箱を取つたじやないか。」

「やだよ、この不思議な靴は、なんと言つても俺が貰ふんだ……」

二人の聲はだんだん高くなつて來て、いまにもつかみかゝりさうな樣子です。

若者がソーと首をのばして見ますと、二匹の鬼の前には、一つの箱と、一つの杖とが置いてあり、眞中に一足の靴が置いてあります。

爭ひは少しも休みなく續けられてゐます。

「この靴は、俺のものだよ」

「なんと言つても渡さないよ」

「この意地惡め！」

「なんだと、慾ばり奴！」

今にもつかみかゝりさうです。じつと見て居りました若者は、たまりかねて、二匹の前へ飛び出しました。

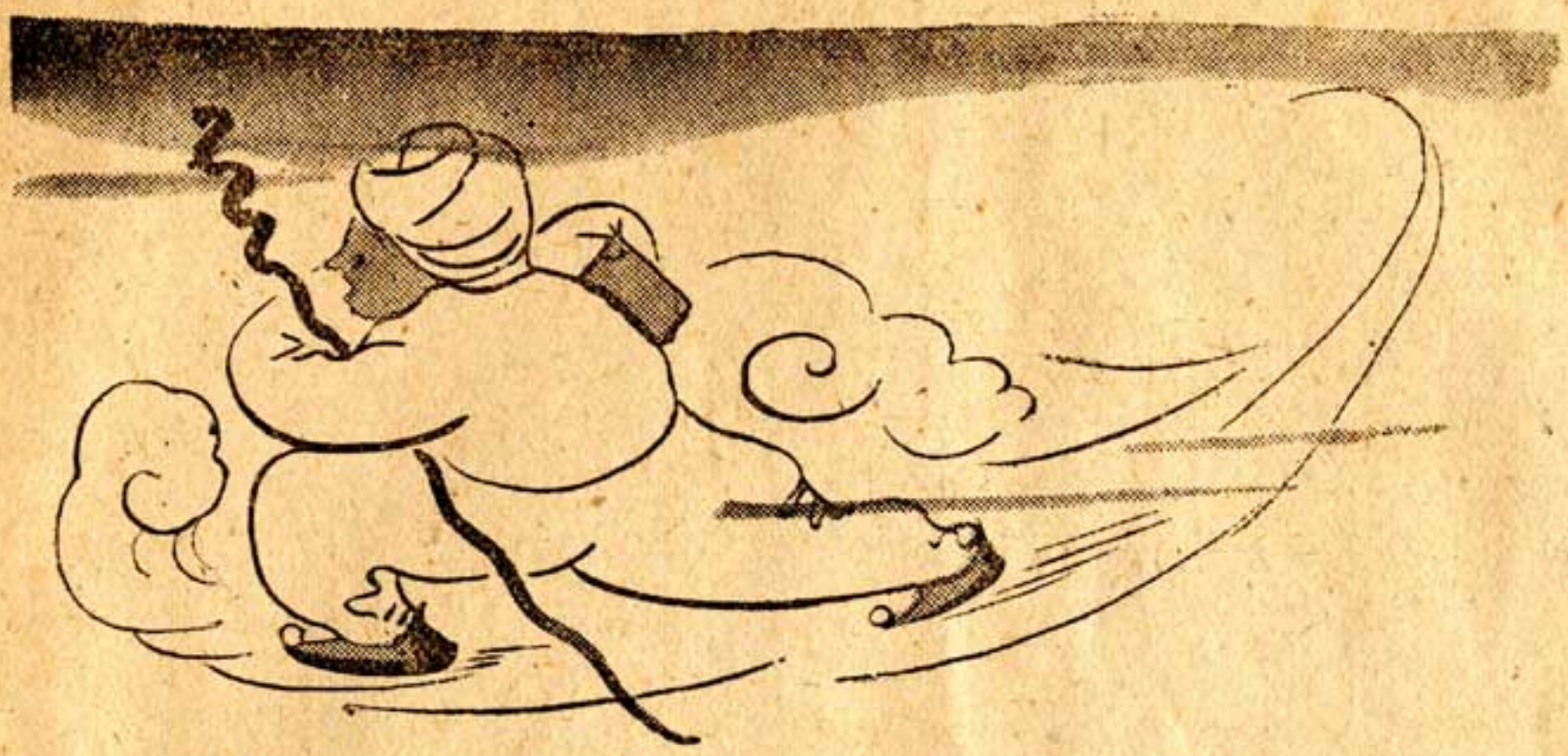
「まあ、待つて下さい、一たいどうしたと云ふのです。」

二匹の鬼は、いきなり飛び出した人間に一寸驚いた樣でしたが、喧嘩の仲裁に出て來たのだと見ると、

「實はこの三つの寶物は、二人でこの國のお城へしのんで行つて盜んで來たのだが、こいつが箱を取つた上にこの靴をくれと云ふんだよ。」

「こいつが、杖を取つた上にまだ靴を取らうと云ふのだよ……」

「一體この寶の箱と杖と靴と云ふのはどんな働



きをするのです。」
「その箱は不思議な玉手箱で、どんなおいしい御馳走でも、どんな綺麗な着物でも出て來るんだ。」
「その杖は魔法の杖で、なんでも願ひ事を言つて三度地面を打てばどんな立派な家でも、橋でも出來上るのだよ——それからその靴は飛行の靴で、その靴を穿けばどこへでも飛んで行けると云ふ不思議な靴なんだよ。」
「なる程、三つとも實に立派な寶物ですね。」
「箱を取つた方はこの靴を取る權利はないね」
「そんなことはないよ、杖を取つた方は靴をとることはいらないよ」
「なにを——」
若者は、二匹を押しとどめました。
「よろしい、それでは、私がお二人に、損得のない樣に公平に分けてあげませう。」
「よし、公平にだよ」
「損得なしにだよ！」
「大丈夫ですよ、今私が、公平に分けてあげますから、一、二の三と云ふまであなたは右の方の岩のかげで、あなたは左の方の大木のかげて、目をかくしてゐて下さい。」
「よし、よろしくたのむよ、あの岩だね。」
「あの木だな、公平にたのむよ……」

二匹の鬼は三つの寶物をそこへ置いて、右の方の岩かげと、左の方の大木の陰へ隱れました。
若者は、二匹の鬼の姿が見えなくなると、大急ぎで不思議な玉手箱を右の脇にかゝへ、魔法の杖を持つて、飛行の靴を穿きますと、そのまま高く飛び上りました。
「よーし、一、二、三だ！」
二匹の鬼が、目を開いた時には、三つの寶を持つた若者は空高くあがつてゐました。あつけにとられてゐる鬼を下に見て、
「馬鹿な鬼共、互に喧嘩をするからこんなことになるんだよ。この三つの寶はお城へ持つて行つて王樣にお返しして來るよ、ではさようなら。」
あれよあれよと騷いでゐる鬼を山の上へ殘して大空へ姿を消して仕舞ひました。（百喩經より）

（月岡榮吉畫）

×　×　×

浄土コント

或る夜の石川五右衛門

五右衛門は數々の偉業を建てた。とても不可能と思はれる寶物珍具を物の見事に盗み出した然し不滿であつた。何故と云ふて彼はあの有名な銀龍院の阿彌陀佛の兩眼を未だ手に入れてゐないからである。それは南蠻渡來の金剛石と云ふ黄金なぞ比較にならぬ逸品であるのだ。この二つの玉を何とかして得ようと彼は夜の目も寢ずに畫策した。何せ銀龍院は猛將片桐且元の信仰する處で取分け本尊の前には詰所迄設けて一騎當千の士が日夜警戒してゐるのである。近頃五右衛門が各所の古刹名城へ忍び入ると云ふのでその護りは一層固かつた。五右衛門はやつと作戰の端緒を得た。何としても大阪の住友家へ忍びいつてその家寶である粉狀の麻醉藥を手に入れねばならぬ。五右衛門はそれを盗む爲に子分なぞやらなかつた。高弟の七島次郎太さえ斥けた。彼自らそれへ向つたのである。如何に銀龍院の佛眼に執着してゐたかが判るであらう。

とう〳〵彼は秘藥を手に入れる事が出來た。

決行の宵、曇り空は月の顔をかくして仕事には持つて來いである。五右衛門は得意の忍び術で幾多の關所を通り拔けていつた。愈々最後の例の詰所である。果して本堂の前に三人の武士が槍を小脇に搔いこんで巡羅してゐる。五右衛門は懐の粉をとりだした。五六間傍迄近付くと一念こめて手の平のそれをふつと吹いた。秘藥は霧のやうに立ちこめる。じつと伺つてゐると二人の武士が霧の中にはいつた。やがてくづれ折れるやうにそこへしやがんでしまつた。他の一人は氣付いて「どうした」と叫びながら件の武士の肩を抱いた。是も同じ運命である。今の呼聲で誰か來ぬか、五右衛門は息を殺して待つた。懐の短刀をそつと握つた。だが幸ひ誰も現はれぬ。ほつとして愈々本堂に忍びこんだ。例の阿彌陀佛の像を上座に、聞きしにまさる素晴らしい內陣である。思ひなしか佛の兩眼は生あるものの如く闇に紅く青く輝いてゐる。既に掌中に握つたも同然だ。五右衛門は迚ひなく近付きかけた。がハツとして歩みを止め傍らの木魚の蔭に打伏した。誰か居るのである。一段高い佛像の按坐した膝の上に何者かゞ蠢いてゐる。闇に透かして覗いた時五右衛門はびつくりした。總毛もよだつ許りである。何故と云つてそこに蠢く者は何であつたか。鬼である。眞赤な頰、唇を割つてとび出る銀色の牙、しかもその口はもぐ〳〵と動いて何か食べてゐるやうだ。鬼は更に金色の布を羽織り何とも云えぬ奇怪さだ。一度短銃の狙ひを定めた五右衛門も引金を引く勇氣に缺けた。彼の胸の中に次のやうな思ひが打寄せてくる。相手は魔可不思議の佛樣だ。鬼なぞ居ないものだと人間は容易く定めこんでゐるが、どうして〳〵あそこにゐるのは確かに鬼だ、悪い事は出來ぬ、人間の淺はかな智慧でどうしてこの神秘が見拔けるであらう。五右衛門はガタ〳〵震へてきた。そして鬼の睨んでゐる眼をやつと逃れて境內に出た。ほつと吐息を洩らした。彼の悲願はずた〳〵に破られたのである。かくて銀龍院の佛像はこの天才的盗賊の魔手から逃れた。

そして例の鬼は佛前の饅頭を食ひ終ると佛の膝をのこ〳〵降りどこかへ消えた。

その頃侍僧殿の隅つこの床へ一人の小坊主が歸つてきて羽織つてゐた金色の絨たんを脱ぎ手にした鬼の面を朋輩が眼をさまさぬやう、そつと長押の釘へ掛けてゐた。鱈腹饅頭を入れて良い氣持になつた小坊主はやがて滿ちたりた深い眠りに落ちてゐた。

信仰相談

擔當　中村　辨康

淨土は眞實に存在するか？

問　過日或雜誌で故倉田百三氏が臨終の床で「淨土は本當にあらうか」と眞劍に問ふたと云ふことを讀んだ。倉田氏は人も知る求道一念に生き拔いて來た人である。その人にして猶ほ生死の關頭に際してこの困惑があつた。吾々の安易な淨土觀は何だか根柢から覆へされた氣持がする。「淨土は眞實にあるのだらうか」御賢答を待つや切である。

（仙臺市　松田三夫）

答　存在と云ふ考へが根柢にあるからこそ結局迷ふのであつて、問題は簡單なのです。佛敎では存在のことを「有」と云つてそれは迷ひであるとして居ます。三界火宅とも云ひます。

欲有（欲界）—欲の世界
色有（色界）—物質の世界
無色有（無色界）—精神の世界
三界

私達には物心二面が繫縛と云つて縛られた形になつて居ますが、それは物事を何でも「存在」として眺めて居るからです。そしてそれは「何時迄もあるもの」と執着して居ります。そこに「欲」が何時でも附隨して色々な問題を引きおこして居ます。ですから三界は存在觀を根柢として居る迷ひの世界であるとして、引きくるめて「三有」とも云ふのです。つまり私達の日常生活のことで、この迷ひだらけの日常生活と等しい狀態で、悟りの世界である「淨土」を忖度しようとするのだから分らないのは當然です。淨土とは「存在」と云ふ觀念から超越した生命躍動の世界のことで、大宇宙の眞實相に外ならないのです。禪宗の言葉に「迷故三界城悟故十方空」と云ふ言葉があるでせう。端的に云へばそれです。然し「十方空」なんて言葉を使つたから分らなくなつて居るのです。空とは自由と云ふことです。何處にも摩擦を起こさないことです。だが單にさう云つた見方だけでは極めて無味であつて宗教情操にはなりません。それを「生命相」とするとき始めて宗教になるのです。凡ての現象は皆な單なる存在ではない。少くとも時間を無視した存在はあり得ません。大なり小なり皆な時間的に變化しつゝけて居るのです。だから凡てのものは實は固定的存在ではなくして時間的變化であり「いのち」であるのです。例へば木の葉が單なる一個の命ではなくして一本の樹としての共同生命態の一分としてあるのであり、また共同生命の進展の爲の一部分としてその一生をつくして居るのでありますが、すべてのものは皆なそれなのです。されば淨土とは大宇宙の「いのち」の世界になづけたものです。迷故三界悟故淨土なのです。之れを若し「何處にあるのか」と存在的に探究するならば何處にだつてありはしません。倉田氏の臨終の疑問の如きは誠に御氣の毒に堪えません。私は倉田さんには一面識あるのですが、宗教上のことは法然上人のことで語り合つたに過ぎませんでした。誠に惜しいことです。

僧衣をまとひて

願共諸衆生 往生安樂國

空外　山本幹夫

空外が念佛三昧に邁進しはじめてより二十有五年、新日本建設の初春、昭和二十一年の元旦、空外道場七覺舍からは六時禮讃を稱へる聲が場外にもれるなかにも、その結句「願共諸衆生　往生安樂國」の餘韻が特に力強く響いて、當の本人も感泣してをり、おそらく心ある道往く人々も之を聞けば感動禁じ難いものがあつたことであらう。嗚呼、六時禮讃の各句とも「願くは諸の衆生と共に安樂國に往生せん」と繰り返し〳〵結んでは佛願の民主的具現を念じた初唐善導大師の本意は、日本佛教の劃期的發足點となつた法然淨土教の原理を形成し、以後まさに朝野を感動せしめて今日にいたつたのであつた。「願共諸衆生　往生安樂國」の民主的宗教理念は法然淨土教においては賢は賢なりに愚は愚なりに、畢竟するに萬民萬樣なりにそれぞれ生を全うすべき平等の慈悲の大道として南無阿彌陀佛の稱名一行が唱導されたのである。實にこの一行は國民生活の光明化を念願し具現してゆくものにほかならず、民生平等の結實以外に佛願なしとする法然開創の淨土宗こそ、現行語を以て表するとすれば、日本的民主的宗教の尤なるものといへるであらう。

わが史上未曾有の敗戰の現實に直面して昭和二十の年末、師走二十八日の朝、七旬餘にわたる病床生活後最初の散策途上、わが生活は淨土へ迎へられる一日一日にほかならぬといふ一念が忽然として空外の念頭に印せられたのである。この一念は淨土教徒にとつては必ずしも新ならず、むしろ餘りに平凡なものとも考へられるであらうが、空外の半生以上にわたる念佛生活上[illegible]でないほどの強烈な自覺を伴つて生命の深奥にまで策勵を感ぜしめるものであつた。果して人生が淨土へ迎へられる一日一日の生活であつてみれば、世相は今日のごとくすさんでゐてよいものであらうか。そこにはかへつて淨土から遙か遠ざかる淺ましい姿が少からず見受けられはしないであらうか。國民生活の民主的淨土化、これがわれわれに課せられた使命のやうに思はれる。

昨年夏、終戰時の混亂後八月下浣久方振りに靜思の一時を得て山寺に一夜を明した節、その一室から眺める山々の風光は、空外の青年時代懸命の修業をして佛道に悟入した頃の自己をふと呼び起し、その道場への歸心矢のごときを抑へることができなかつた。用件を終へるや直ちに空外の魂の故里へ急いだのも、青年時代以來のいはば廻り道を猛省し、心機一轉、新時代への直通路を把握せんがためであつた。さうして一應戰塵を洗ひ清め、今後生命のあらんかぎり國民生活の民主的淨土化に挺身せんとして得度を決意し、一は法然上人開宗の四十三歳なりしを思ひ他方空外その年の誕生月九月を期して上洛、知恩院に直參して望月管長より度牒を受けたのである。前述の「願共諸衆生　往生安樂國」の感涙も、淨土へ迎へられる一日一日の達觀もみなそこより流出せるものにほかならぬ。思へば從前の念佛三昧一行の生活を往相とすれば、今後のそれは還相として、往還二相相卽の念佛三昧一行に徹したいものである。

入佛門記

法圓　川瀨專之助

浄土コント

生きる道

彼は失業してもう半年になる。中學も出てゐるのだしまさか乞食も出來ないし何かまともな職業を探さうと足を棒にして歩き廻るのだけれど一向に口はなく金のはいつてくるあてもなかつた。親戚や友人を訪ねては小遣ひをせびつたり一宿一飯を得てゐる現在を思へばやつぱり乞食に違ひなかつた。それも今は不義理に不義理が重なつて愈々身動きが出來なくなつた。公園のベンチに坐りあゝこれからは本當に「右や左の旦那様」と頭を下げてお貰ひを始めようかとも考へてみた。だが高等教育を

私はよくどんな動機から僧門に入つたのかと人に問はれる。だが眞實の處自分自身でも分らないのである。生死の岐頭に立ち廓然頓悟したのでもなければ生老病死と常無き人生に苦悶した末と言ふのでもない。五十年の來し方を顧て私は斷えず平和であつた。明るくもあつた。生きる事自體に歡びすら感じてゐた。然し今心を靜め思ひかへしてみる時、私をこゝへ導いた佛緣の深さを氣付かずにはをれない。何故なら里見達雄師、岡本貫玉、故木村玄俊兩僧正から得度してはとの勸說を賜つた折、私はまことに逡ふ何物もなく水が高きより低きに流れる如く亦岬に湧いて出る白雲のやうに自然法爾のまゝに僧門の人となつたのである。これが緣でなくて何であらう。この私の生涯にとつての大きな變化がその繼目に微塵も節を殘さないで行はれたと云ふ事は大慈彌陀の尊いお召しでなくて何であらう。

だが思へば私と淨土宗との因緣は決して淺からぬものがあつた。四十餘年前芝中學校に入學して以來東大法科に在籍してからも私はたえず母校の校長故渡邊海旭先生から佛法の薫化を受け續けた。その後辯護士生活二十七年の間、法律顧問として或は芝中學校に大本山增上寺に亦東京養老院に而して現在の淨土宗務所と、私の生きる領域の全ては是僧門の世界でありまた蓮華の香り豊かな彌陀の慈みの垂れぬ處に私は生きて來なかつた。だから得度なぞと今更のやうな氣もしないではないのであつた。然し智恩院門跡大僧正郁芳隨圖猊下を戒師に頂き昭和十七年嚴多二月末日增上寺で得た入門の儀は深い印象となつて今も私の胸裡をほのかに照らしてゐる。何と云つても人生の轉機を劃する事實であつたのだらう。

その後信仰は愈々心火となつて燃え戒體を發得し日修念佛を怠らぬのは今にして思へばやはり心の信仰が嚴しい僧衣をまとふて一層大きく具體化した爲であらう。

永い法律生活に條文の因果關係で全て此の世を律してきた私にはかゝる日々が恰も偏屈な狹谷から豁然たる廣野に解放されたやうに感ぜられる。日毎夜毎現世の惑惱に束縛される祖國人民大衆にこの光明の心意をお傳へしたいのは私一人であらうか。

私は本年初頭に淨土宗日本善導教會を湘南藤澤市に創立した。宗祖上人の遺訓に遵ひ念佛禮拜行と一枚起請文をば實修する教會で、伽藍は無いが私は自分の繰る唱名念佛の一つ一つが無形の殿堂を築き上げてゆくと信じてゐる。そして念佛一行に我が法律生活を融合せしめ、ありがたい佛緣の深さを噛みしめながら迷へる人民を一人でも多く同行の友として導きたいと念じてゐる。

僧衣をまとふて、私は何と云つても自身の古里に歸來した思ひである。（筆者は法學士）

受けてゐる自分がそれでは餘りに淺間しい。この時彼はふと名案が浮んだ。さうだ、監獄へはいればよい。そこで懲役に服すれば仕事も出來、食ふてゆけるでもあらう。有頂天になつて彼はそれに定めた。では何か犯罪をする必要がある。人でも殺せば――これは不可い。下手をすると死刑にでもなつて元も子もなくしてしまふ。とう〳〵一つの犯罪を思ひつくと彼は悠々とベンチを立つた。そして街角を折れて門構へも立派な料亭へぐん〳〵はいつていつた。空腹な折だ。饑腹無錢飲食をして獄へ行ければこんな旨い口はない。まさか無錢飲食では死刑にもなるまい。

玄間に立つと女中が出て來た。彼は胸を張り「料理は出來てゐるかね」と落着いて言つた。「どうぞ」女中は怪しみもせず彼を案内する。部屋に通されると酒、料理の一番高さうな奴をどん〳〵取つた。食べながら罪惡ついでにそこにある金目のありさうな軸だの飾り物なぞを懐にねぢこんだ。さあ終りだ――多少沙婆へ袂別の感慨も含めながら彼はゆつたりと元來た玄關へ出た。汚い下駄がちやんと揃へてある。それをつゝかけて亦ゆつくり玄關を出た。處が誰も追ひかけて來ない。一遍出てから引返して邊りを伺ふ。下駄でガタ〳〵踏みならしてもみた。すると果して先刻の女中が飛出して來た。「是はお歸りですか。つい忙しかつたものですからお送りもせずに毎度有難う存じます」と三つ指で神妙に頭を下げる。彼は寧ろいら〳〵してきた。「君、勘定は良いのかい」「はあ、もう頂いてをります」彼には何の事か分らぬ。「いつ拂つたかね」「あら醉つてゐらつしやるのでせう。ちやあんと頂きましたわ」彼はびつくりした。慌てて懐を探つてみた。だがそこには來た時と同じやうにぺしやんこな空財布が胡坐をかいてゐるばかりだ。彼は序に例の掠めた軸を取出した。「君、これを貰つてゆくぜ」「えーえ、お氣に召したものならどうぞ――」愈々變である。彼はもう一度上つて先刻飲み食ひした部屋の前にきた。するとそこには木札に「前川様」と自分ではない名前がかゝつてゐる。きつと前川と云ふのはこゝの良い顧客なのであらう。つまり今夜約束して前拂して而も都合で來られなかつたのだと思ひ當つた。まんまと自分はその遇然に紛れこんだらしい。彼は可笑しさと妙な悦びが一緒になつて踊るやうにその料亭を出た。

例の公園に戻つた時ひんやりと當る夜風はいつもと違つて醉ひ飽食した彼にはこよない涼味を與へた。

「何だい。世の中なんぞ簡單な物ではないか。運命の喰ひ違ひに巧みに棹さしてゆきやあ何の俺一人位立派に食はせてくれるものだ。もう監獄へなんぞゆくものか。あのコツでやつてゆけば良いのだ」

呟いてみると森の上に輝く星まで自分の行途を恍々と照してくれてゐるやうに思はれた。生きてゆく樂しさ、面白さが久方ぶりに胸へ蘇つてきた。彼は勿論戻る家とてないのでベンチにゴロリと仰向いた。いつかとろ〳〵暖かい眠りが襲つてきた。

ふと目をさますと誰かが肩を小突いてゐる。見上げると八の字髭の巡査だつた。「お前は毎晩こゝで寢てゐるな。浮浪者なんだらう。さあ來い。飯の食へる處へぶちこんでやる。性もない奴だ」彼はとう〳〵巡査に引かれて豚箱へ向つた。「先刻のはきつと夢だつた」と彼は自分にしきりに信じこませてゐた。

かくて彼は當初の希みどほり懲役といふ正業につくことが出來た譯である。

――了――

×　×　×

小説

閻魔秘帖

草田直宗

　鰻入の夜偶然拾つた閻魔大王の議事錄の公開を始め私は今激しい後悔に包まれてゐる。なぜなら私は既に二つの罪ををかしたからだ。第一にあの夜私は大王側近の人（さうだ、あの中折帽の端から金髪を覗かせ鋭い牙さえ見せてゐた男は閻魔の府で記錄整理を司る遮文茶氏に違ひなかつた）――彼をまんまと詐りそんな卷物は影さえ見なかつたと空嘯いたではないか。二つに大王の著作を無斷で而も貧しい語學力のために眞意を傳へ得ない飜譯をした罪である。死後墮獄したら（私は地獄へ墮ちるに定まつてゐる）どんな裁きを受けるであらう。思へば身の毛もよだつてくる。筆を進める勇氣なぞ毛頭起らない。だが諦めた。私だけが八裂きにされるなり陰中に針を突刺されるなりすれば良いのである。此の公開によつて愛する人達が未來に裁かれる眞實を知り恐れを新たにして現在の行爲、生活へ一層の三省悔悟を深めて呉れゝば聊かなりとも救はれると言ふものだ。一片なりとも犯した罪は終生償はれまい。五十歩百歩の諺通りどうせ犯した我が身である。紙員が許される範圍で私は祕帖の内容をお傳へしよう。書き續けることにしよう。

第二話

　閻魔の世界にも四季がある。夏の朝なぞはひとしほ爽かな風が吹いた。朝飯を濟ませた大王は慣例の散歩に今朝も出た。裏庭の果實や草花の香る邊りを拔けると言ひやうもなく心が寛いできた。上機嫌になつて朝顏の一輪を摘むと大きな鼻元へ幾度もかざしてはその豐かな匂ひをかいでみるのだつた。いつか歩みは刑場の中に進められた。熱湯の沸る小川がある。今そこでは生きてゐる頃嘘妄の罪を犯した子供達が涙にむせびながら手を濕れさせて食器を洗つてゐる。そこを渡ると飢餓の河原がひらけた。幾千の老若男女が食べると云ふ貴さを忘れた酬いに骨と皮の身をもみしだいて轉げまわつてゐた。やがて大王は血の池の畔に出たのである。朱の色が鉛狀に重く淀むその水面は誰の心をも震へ上らさずにはをかない。然もその淀みに蠢めく罪の群れ、更に眼を轉ずると遥か向ふ岸に屹立してゐるのは針の山だつた。今朝も重い石を背負つて償ひの苦しみへの營みを始めてゐる人々――大王はそれらを淡々とした表情で眺めつゝ歩みを靜かに運んだ。

　その時、蹄の音も高く一匹の馬が驅け寄つてきた。いや馬と呼ばれるのはその體軀と四肢であつて長い頸の先についてゐるのはまさしく人間の顏だつた。眼の窪んだ、額に深い三本の皺を刻む空しい表情だ。彼は日毎夜毎全力を出し切つては血の沼の畔をはしり續けてゐるのであらう。ピタリと大王の前に停ると鼻の穴から激しい喘音をいくたびか吐きつゞけて動悸をおさえてゐる。

「どうした、汝の業を怠るのか」

　大王の和やかな語調の裏には氷柱のやうなきびしさが含まれてゐる。

「大王樣、私は貴方に會ひたかつた。あの裁きの日に言ひ得なかつた事をぶち蒔け度いのです」

「ほゝう。閻魔の審判が不服だつたか」

「おう、不滿ですとも、私は寃罪だ、むぢつの罪なのです」

　男は、いや馬は前脚をびーんと突張つて鼻面

を天へ向け哄然と言ひ張る。

「はて、そのやうないわれはない筈だが、まあ聞こう。話してみよ」

「私はづつと昔貴方の前に引き出された。そして罪のない子供を殺害したと云ふ罪狀で今迄この沼の周邊を明けても暮れてもはしつてをらねばならなかつた。何年つゞけたらう。幾度も考へた。果して私は罪の無い子供を殺した兇狀の持主だらうか。思へば思ふほど私にはうなづけない。身に全く憶えのない事です、私は寃罪だ、解放して下さい」

「これよ、もつと氣を落着けてゆつくり物語るが良い、お前は何をしたのか」

「私はもと、ある高貴な身分の方の守護役であつた。親の定めた妻との間に三人の子を設け忠實にその職務を守り平和に、而も爪の垢程の罪惡も犯さなんだ。それなのに私はこんな地獄に追ひやられて苦業を續けるとは何と云ふ因果であらう……」

「儂は汝だけに係りあつてをれない。手短かに話すが良い」

「事件と言ふのはとるに足らない事だつた。私の警護する處はその高貴な方の御寢所で所謂ば一番大切な役割である。その頃世の亂れと共にその方の生命を狙ふ佞奸が出沒し始めたので殊更に嚴戒するやう上司から言ひ含められてゐた。寢所の外側に柵があつて、役目以外の者は譬へ誰であらうとその柵を無斷で越えたなら即刻斬り倒せとも命ぜられてゐた。ある夜、それは多も闌な正月の頃で東の方に赤黄色い月が無氣味な光を注いでゐる冷たい夜だつた。私は凍てつく爪先を地に叩いては生氣を蘇へらせつゝ太刀のつかを握り直し巡羅を續けてゐた。曉方に近くなつた頃柵の處で異樣な物音がする。寂破一大事と足を忍ばせて近付いてみた。何と不敵なのであらう。小さな黑い影が唆ひもなく柵をくぐつて侵入してくるではないか。私は苦もなくその襟頸を引とらへてやつた、見れば十二三の丸顔の子供なのである。拔いた太刀を振ふのも一瞬ためらはれた。——何の用ではいつてきたか、——子供はきよとんと見上げて——あのおうちの綠の前に紅い可愛い花が咲いてゐるのを晝間見たんだよ。欲しくなつたから取りに來た——私は答へる——嘘だらう、誰かに頼まれてきたんだらう——子供は口をとがらせて言ふ——嘘だもんか、晝間見た時別の小父さんが見張つてゐたから取つてお呉れと頼んだら駄目だとつきとばした。でも俺は欲しくて〳〵ならないんだよ、あの花を佛壇にあげたらどんなに綺麗だらう。家の佛壇は汚なくて寂しいからなあ。明日は死んだ母ちやんの命日だもの、きつと悦ぶんだよ。今のお母さんは命日でも何も供へてくれやしない。母ちやんは獨りぼつちで可愛想だよ——私は迷つてしまつた。でも本分を忘れなかつた。職務にはあくまで忠實でなければならない。——不敵な間諜奴、童とて容赦はせぬぞ。——私は拔く手も見せず心を鬼にして斬つた。小さい首は小株

のやうにころげ落ちた。淡い悲しみと空ろな感情がこみあげたがそれよりも私は己が本分を守り通した誇りに滿足した。勿論次の朝上司にその旨を傳へたがお咎め處か賞詞さえ受けたのである。それ以外私は生涯を終へる迄何一つ罪を犯してはゐない。それが何たる事か、大王の審判は私を子供殺しと云ふ忌はしい罪名の下にこの殘虐な刑罰ではないか」

大王は默つてゐる。

「私が殺したのではない。殺さねばならぬ役目にあつたのだ。殺したのは私の太刀でこそあれ實は規則であつた。責めるとしたらその規則、私に強ひた高貴の方をなじらねばならぬ。私がこんな苦しみを受ける義務はないのだ」

大王は靜かに口を開いた。

「汝は、何故そんな無法を命じた上司をそこで糾さなかつたか」

「そんな事がどうして云へませう、私はそこで使はれてゐる、唯上の人の云ふがまゝに從つてゐれば良いのです」

「汝は人間か、それとも人の皮を着た單に動く物質なのか。ようく聞けよ。規則は人間が作つた物である。人間が相互の安寧を維持するために作られたのだ。死んだ者ならいざ知らず、生きた人間には血が流れてゐる筈だ。汝は何故職務に忠實と云ふ勇氣をその暖かい血を守る爲に用ひなかつたか、子供の求める花を摘んでやつて穏かに戻してやれば良いではないか」

「そんな例外は規則に指示されてをりません」

「愚かな奴だ、聞けばその子供は亡き母の靈を慰めるためと云ふではないか。お前だつて自分の子供にさうした愛情を寄せられた時規則に違ふと拒みはしまい」

「いや家庭に歸れば別です。公人と私人の間にはつきりと一線を引かねばなりません、拗くとも私が警護の任に在る時はなまさかに感情に左右さる可きではない。是が人間の生きる道です」

「はてさて悲しい奴ぢや。では汝は規則が命ずるならば敢て水火にとびこむも辭せぬと言ふのだな」

「さうですとも、私は正しい道を歩き貫いてきた。大王、さあこの地獄から解放して下さい。むじつの罪です」

「分つた。お前の規則に忠實な信念は認めてやらう。お前の欲するやうになしてやらう」

男の頰が悅びにさつと紅みをさした。だが大王は男の頸根を輕々と吊し上げると血の池へほうりこんでしまつた。その眞中邊りが鈍い波紋を描いた。男はずぶずぶ沈んでいつた。

「よく聞けよ。この閻魔大王の世界には、現在の刑罰に不服を訴へたり自れの業を怠ける者には一層重い刑場へ移す規則があるのだ。汝は何をいても規律に忠實でなければならぬと今ら そぶいた。その沼の底で幾歳も喘ぎ續けるが良い。汝の欲する、亦汝でなくては住めぬ場處が待つてゐよう——」

大王はすた〳〵とその場を去りかけた。今迄の上機嫌な表情も失せて深い悲しみと嘆きの色ですつかりつゝまれてゐた。それでもまた歩みを戻すと指先に挾んでゐた一輪の朝顔を罪人の半ば隱れた顏の當りへポーンと投げられ

「よくこの香りをかいでみるがよい。これには生きると云ふ暖かさが一杯籠められてゐる。人ではない冷嚴な裁きの任にある閻魔でさえがこの香りを大切に胸にしまつてゐるのだ」

吹き寄せる一塵の涼風はその朝顏の香りを血なまぐさい河の水面に蒔き散らすのでもあつた。（本號カット・挿畫、月岡榮吉）

本誌は部數に制限があります本會あて直接に年定め豫約下さい。會費年送料共六圓六十錢です。

◇編輯後記◇

田邊元博士がある雜誌の「日本民主々義の確立」と云ふ論文の中で次のやうに述べてゐた。「今や日本の現實は終戰の危機に於て圖らずも共産主義の獨裁的立場以外に於て無一物の宗教的立場に徹する連帶民主々義を必然ならしめる……」と。是は大變含蓄ある言葉と共に當然すぎるほど當然な結論であると思ふ。

この悲しい日々は我々に腹を充たし心を豊かにさせ人生を歡んで押し進めて行く事を許さない。平和の概念を戰前のそれと結びつけて考へるならば我々は常に裏切られ憤滿を湧かしふさぎの虫に追ひこめられてしまふであらう。

我々は何にも持つてゐないのだ。貧衣弊履を身に付け草の露に一夜を結ぶあの雲水と同じ環境にある。雲水はその人生を呪ふだらうか。嘆くだらうか。いや、彼は與へられた一椀の粥に舌鼓を打ち星の輝く草枕の眠りに安住の庵を謳歌し心を豊かにしてゐる。何故だらう。

雲水のたなごころには一聯の念珠が握られてゐた。彼の胸には不壞の信仰がたへず清水の如く滾々とあふれてゐた。雲水は引き千切れた貧衣を金蘭にも想ひ、星の宿を大廈高樓にも例へてゐる。唯握りしめた念珠に全ての人生を捧げてゐればこそ……

あゝ、みんな苦しいのである。一人一人が明日を迎へる時不安と焦燥の涙を噛みしめてゐるのだ。

國民は戰爭中二つの惡い習慣を身につけてしまつた。一つは軍隊の生一本さをそのまゝ現はした無計畫な放縱であり他は所謂官僚の己れの仕事に責任を持たず時間の經過だけに依存する怠惰である。前者は今、定職を輕侮し忌避する自暴自棄な蠻行に發展し後者は既に立上る意志さえ起さぬ無氣力と・なつた。

誰もが自らを省みてかの習俗に染まりきつた自身に氣付くであらう。戰爭犯罪人を追究する以前に我々はこの獅子心中の虫を追放せねばならない、如何にしてこの蕪れ果てた焦土に何も持たない丸裸の自分が欣然と生きゆく道を見出し得るか、究明すべきである。

こゝにこそ田邊博士の結語の妥當性も普遍性もあると信じたい。

新刊

吉田絃二郎著

武藏野記

B6版 二〇〇頁 定價八圓

豫約受附中

發行所 船形書院

取次所 法然上人鑽仰會

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十一年三月廿日印刷納本・昭和二十一年四月一日發行

浄土 第十二卷 第二號

定價金五十錢（送料五錢）

浄土 四月號

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可
昭和二十一年三月二十日印刷納本
昭和二十一年四月一日發行（定價五十錢）

東京都芝區芝公園淨土宗務所 編輯兼發行人 眞野正順

東京都芝區芝公園淨土宗務所 印刷人 村瀨秀雄

東京都牛込區市谷加賀町一ノ一二（東京一） 印刷所 大日本印刷株式會社

配給元 東京都神田區淡路町二ノ九 日本出版配給株式會社

發行所 法然上人鑽仰會 東京都芝區芝公園淨土宗務所內 振替東京 八二一一八七番 會員番號 一三〇〇〇二

會費 一ヶ年 金六圓六〇錢（送料共）

振替拂込みはすべて十錢增のこと